

メディアテキストと地域開発のディスクール

— 熊本県湯前町を事例として —

小 林 直 毅

要 約

現代日本の地域開発においては、「地域おこし」という多義的なディスクールが用いられることによって、地域住民の活動が、開発のための資源として動員されている。とりわけ、自治体の開発政策や、地域住民の活動が、さまざまなメディアによって紹介されるとき、このディスクールがメディアテキストにおいて編成され、その多義性ゆえに、さまざまな地域住民の活動とその多様な意味を、開発政策に収容することを可能にし、文化的資源として動員しているのである。

熊本県湯前町では、50年にわたって活動を続けてきた下村婦人会が、その活動の歴史、意味、成果を、「地域おこし」という多義的なディスクールをともなって展開される地域開発の資源として動員されつつある。本稿では、この婦人会をめぐるメディアテキストと、そこで編成されるディスクールの特徴をとおして、こうした地域開発の在り方を明らかにする。

はじめに

全国各地の市町村で、地域の開発や振興を目指した構想が、行政、民間のいずれの側から提起される場合にあっても、それらのなかに「村おこし」、「町づくり」、「地域おこし」、「地域づくり」といったキーワードが頻繁に用いられるようになってから久しい。地域行政によって補助金の運用や配分が進められる際にも、「住民の『村おこし活動』を支援する」ことがその目的として掲げられたり、道路や住宅、あるいは公共施設の建設事業が推進される場合にあっても「『地域づくり』構想の一環」であることが強調される。また、地域住民によって新たな活動の展開が試みられる場合も、それが趣味の同好会活動であっても、異業種従事者間の交流会であっても、あるいは障害者支援のボランティア活動であっても、その内容にかかわらず「住民間の新たなネットワークを築くことで『町づくり』に資する」活動であることが謳われるのである。そして日本全国のいたるところに、「村おこし」のための温泉宿泊施設やコンサートホールが建設され、住民の「町づくり」活動によって産み出された新しいイベントや特産品が登場し、それらが新たな観光スポットとして喧伝されるまでになっている。

とりわけ1980年代後半以降には、メディア環境の急激な変容をともなう消費社会化の進行によって、こうした「地域おこし」、「地域づくり」を何らかのかたちで含意する行政の施策や住民の活動が、目新しい施設やイベント、あるいは特産品などとともに、さまざまなメディアを通じて紹介されてきた。たとえば、テレビジョンにおいてはこの時期から、かつての「旅情報」番組、あるいは「紀行もの」と、「料理番組」を融合させた、「食べ歩きを」をテーマとする番組が登場するようになる。こうした番組では、地域に独特の風物、景観や伝統的な郷土料理ばかりではなく、特産品や風土を活かした新しい「名物料理」、それらを提供するために新たに建設された施設、あるいはそうした産品を製造、提供したり、イベントを運営する地域住民の姿を、「地域おこし」の施策や活動として紹介している。

たしかにこれまでも、ある特定の地域が、マスメディアによって紹介さ

れたことを契機として観光開発が進むといった現象は、典型的には、NHKの「大河ドラマ」の主要な舞台となった地域が、にわかに観光地として活性化するという事態となって散見されてきた。また、こうしたマスメディアのプロモーション効果に、各地の自治体、商工団体、観光業界はもとより、地域住民も何かしらの期待を寄せていた。しかし、近年に特徴的なのは、行政、住民いずれの側も、それぞれの仕方で、さまざまなメディアやネットワークを利用しながら、それぞれが「地域づくり」や「地域おこし」といった意味を含んだ独自のディスクールの編成するようになりはじめたことである。地方自治体も住民も、テレビ番組などに登場する機会を、ただ待ち受けているだけではない。テレビ番組や映画のロケーションを積極的に誘致したり、さらにはプロモーションのための、いわば自前のメディアやネットワークを開発しつつある。つまり、利用可能なメディアの種類と量が拡大することによって、行政も住民も、それぞれが独自のメディア環境を構成しようとしているのである。その過程では、テレビジョン、新聞、広報誌、タウン誌などはもとより、インターネットなどの新しいメディアも活用され、こうしたさまざまなメディアによって、多層的な意味を可能とするメディアテキストが織り成されていくことになる。そしてそこには「地域おこし」、「地域づくり」にかかわるさまざまなディスクールが編成されているのである。

地域社会をめぐるこのような動向は、これまで「地域情報の発信」の試みとみなされたり、またメディア・テクノロジーの急速な発達によって、自治体と住民にとって利用可能なメディアが、従来のマスメディアばかりではなく、新しい情報メディアにまで拡大していることに注目して、情報社会論の系譜のなかで「地域情報化」として論じられてもきた。しかし、ここでもう一つの注目すべき点は、現代のメディア環境において織り成されるメディアテキストのなかで、こうした一連の「地域おこし」、「地域づくり」をテーマとするディスクールの編成していくことが、今日の地域開発の在り方として重要な位置を占めつつあるという点にほかならない。

1. テレビドキュメンタリーと「貧乏物語」

地域住民の生活と活動をめぐって、今日では、テレビジョンや新聞、雑誌などの、身近で日常的なメディアをその構成要素とするメディアテキストにおいて、数多くの「地域おこし」、「地域づくり」というディスクールが編成されている。このようなメディアテキストでは、まさにテキストにおける意味の多層性ゆえに、さまざまなディスクールが、それ自体は直接的、明示的に「地域おこし」や「地域づくり」に結びつかなくとも、テキストの相互的な関係のなかで、そうした意味をもったディスクールへと編成されていくことが多い。その一つの事例を、熊本県の湯前町に見ることができる。

湯前町には、1950年から50年近くにわたって活動を続けている下村婦人会がある。この婦人会は、結成以来、山北幸を会長として、おもに地域での余剰農産物や転作作物の野菜を加工し、「市房漬」と名付けた漬物の製造、販売を通じて、会員農家の現金収入としたり、子どものための施設を学校や町に寄贈するといった活動を展開してきた。婦人会の結成当時、湯前町では農地改革にもなって、農業協同組合がかつての小作農家を中心とした組合と、地主農家を中心とする組合とに分裂し、農村共同体も分裂しかねない危機にあった。地元の開業医の妻であった山北は、医院の受付窓口にて、病気の子どもの連れて通院する地域の婦人たちが、地域共同体の分裂とはぎやくに、母親として互いに子どもの病状に気遣いながら相互に声をかけあう関係にあることに気づいた。また現金収入の乏しさから、農家が十分な医療を受けられずにいる状況を克服する必要性を、やはり開業医の妻として認識するにいたる。そうした状況認識と、家業が農業ではなく医院であるために、地域の婦人たちに声をかけやすかったという事情もあって、山北の提案から下村婦人会が結成され、現在に至るまで山北を会長として活動を継続している。

下村婦人会の活動と、それを通じて生産される「市房漬」をはじめとする30種類以上の製品については、これまでも新聞、雑誌、テレビジョンなどのマスメディアをつうじて何度も紹介されてきたが、1996年の国土庁主催の「地域づくり全国交流会議高岡大会」で、この婦人会が国土庁長官賞と同大会

実行委員会会長賞を受賞したことから、山北と下村婦人会の歴史と活動取材した、約30分のテレビドキュメンタリー番組が制作され、同年12月7日に熊本朝日放送(KAB)によって熊本圏域向けに放送されたのである。『「愛情」漬けて46年——山北幸と下村婦人会・湯前町——』というタイトルからもわかるように、この番組では、ナレーションを中心にして、山北個人、下村婦人会のメンバー、湯前町の関係者、そして、婦人会結成以来、山北個人と関係が成立した全国各地の関係者へのインタビューを盛り込みながら、婦人会の歴史と現在の活動を舞台とした「山北幸の物語」が構成されている。この物語の展開に沿って、主要で特徴的なシーンをここに取り上げてみよう。下村婦人会の草創期については、次のように描かれている。

【シーン1】

ナレーター：戦後、地元で医院を開業しましたが、お金がないからといって子どもを病院につれてこない母親たちをしっかりとばしながら、貧しい農民たちを暖かく支えてきました。また、農地解放で二つの農協ができ、その対立は子どもたちにまで尾を引いていました。

山北：やっぱ、わかりますよ。親についてのもん。

インタビュアー：子ども？

山北：ええ、(中略)親たちが、しょっちゅういつてるから、子どももなんとなく、それわかるでしょう。だから子どもたちが、やっぱ子どもたちが、やっぱ一番かわいそうですよね。貧しいんだもん、とにかく。

ナレーター：山北さんは、婦人だけでも一つにならなければと婦人会をつくりました。試行錯誤の末、余った農作物を使った漬物作りが始まり、集団就職で町を離れる子どもたちのために、故郷の山から名前をつけた市房漬が生まれました。少しずつお金がたまると、自分たちで漬物工場をつくり、応援してくれる人も増えました。社会学者として、婦人の地位向上をめざしていた福永さんもそんな一人でした。漬物研究のため、山北さんを東京のデパートに案内したり、著名なデザイナーをつれてきたりしました。

福永：あのとき私はね、本当に、東京から行きましたけどね、感極まって泣いちゃって。世の中にね、こんなにいいこと、あるのかしらと。みんなが一生懸命やったのをね、認めて、町でね、認めてくれたわけですよ。

ナレーター：必要にせまられて、子どもたちの施設も次々につくりました。

山北：町おこしなんて、そんな大それたこと考えてませんわ、はじめから。

お互いの、とにかくお互いの生活をね、なんとかして、子どもたちが、やっぱりあの子どもたちのためにですから、結局、で、一生懸命お母さんたちが、心をあわせて、そして仕事したわけですから。

福永の紹介で、下村婦人会の活動が1971年の『暮らしの手帖』で大きく取り上げられ、全国に知られるようになると、湯前町まで山北を訪ねてくる読者も現れた。

【シーン2】

ナレーター：昭和45年、下村婦人会が『暮らしの手帖』に紹介されました。

この記事を読んで湯前町を訪れた平石さんは、それ以来26年間、山北さんと文通を続けています。平石さんは当時24の青年でした。

平石：（中略）本当にあのにこやかなね、頼れるおばさんって感じですよ。

ああ、この人がその、お母さんをみんな誇りに思ってるいう、村の人たちがね。そのお母さんのトレードマークというかね、本当に、あのにこやかなね。だれをも、ぱっと自然に受け入れるというか、そういうおばさんでしたね。胸にジーンとききましたのは、今日も夜、夜行で鳥羽へ帰りますいいましたら、じゃあ夜はお腹空くでしょうから、お弁当もっていきなさいということで、おにぎりを作ってくれました。それも、たしかね、夜用と、次の朝用と二食。まあ、そのあたりが、山北さんならではなんですよ。そして帰りの夜行列車のなかで、そのおにぎりをあけたんですね。そしてにぎり飯と、そして市房漬と、そしてゆで卵がありました。今でも一人旅が好きですから、日本全国いろんなところへ旅して、あちらこちら歩きまし

たけども、こんなに初対面で、こんなに知らない人を親切にして下さったという人は、山北さんが初めてですね。ガタゴト、ガタゴト、夜汽車に揺られながら、本当にボロボロ涙が出てきましたね。それから、ずうっとペンフレンドですよ。私のね、最愛の、そしてあのオールデスト・ガールフレンドですね。

山北個人の形成するネットワークは、歴史とともにさらに拡大していく。横浜から出荷されるシクラメンの販路を調べようとする学習で、小学生が花に手紙を添付したところ、たまたまそのシクラメンを手に入れた山北が返事を出したことから、横浜の小学生たちと、その家族、そして担任の小学校教諭との交流が続いている。番組では、そうした関係者のそれぞれの談話を、山北の談話と交錯させながら紹介する。

【シーン3】

ナレーター：鳥羽の平石さんをはじめ、山北さんは多くの知人と文通していますが、83歳の今でも、毎日深夜2時まで手紙を書いています。横浜の小学生たちが、地元から出荷されるシクラメンに託した手紙を、たまたま受け取った山北さんが、返事を書いたことから、70人の生徒たち一人一人との文通が始まりました。三日三晩寝ずに書いたこともあるそうです。小学3年生だった子どもたちも、今では中学校3年生です。担任だった上村先生は、子供と山北さんの文通を一冊の本にまとめました。

村上(横浜の中学生)：山北さんは、私たちの手紙が届くのを、いつも楽しみにしているそうです。そして、クラスの一人一人に丁寧に手紙を下さいます。もう7年も文通が続いているので、何十通もの手紙をいただきました。手紙だけではなく、山北さんが作っているお漬物やジャムも送って下さいました。

山北：もうあのころね、よく書きましたねえ。もう、どうかしたら一人一人書かなきゃいけないでしょ。でもかわいいですもんねえ。こんなおばあさ

んに、どこの子どもがあんな、あんな本当に、うちの孫だって、そんなやっ
てくれないのに、もう本当に見たことないようなおばあちゃんにねえ。

村上：なんか、手紙が来るのが、すごい楽しいんで、毎日まだかなと、友達
といていたような気がします。

辻田(横浜の中学生)：もう、はやく返事書いて、はやく出して、また次のが
ほしいっていうか。

インタビュアー：それでどうですか、漬物の感想は。

米沢(横浜の中学生)：すごい、おいしい。

インタビュアー：おいしい？

米沢：うん。

インタビュアー：そう。

米沢：家族みんなで食べてますけど、おいしいのは自分で食べます。

辻田：ああ、何も添加物が入ってなくて、すごいいいとか、そういうところ
に着目してて、私まだそのとき小学生だったから、そんなによく分かん
なかったんだけど、ああ、でも、やっぱ、すごいからだにもいいんだとかいっ
て、家族で、全員で、おいしく食べさせてもらって、すごいおいしかった。

上村(横浜の教諭)：そのとき、あの一、なんていうんですか、山北さんのね、
その愛情こもったお手紙をくれてますけど、それで愛情漬っていうような
言葉が、おそらく山北さんが、本当にあの気持ちこめて作っている漬物だ
ろうってことで、タイトルが愛情漬。

山北：愛情漬。私は、あの、あの模造紙に書いた、こんなあれが来たときは、
もう涙が止まりませんでしたわ。とっさに、それ、思いませんもの。本当
にそれはもう、自分が作っているものにたいしては、やっぱり一生懸命し
ますわね。だけど、あの子どもたちが、おばあちゃんたちが作っている漬
物は、自分たちの健康を考えてって、とてもじゃないですよ。そこまで
思いいたらなかった。そりゃもちろん、いろんなねえ、あの防腐剤とか
なにかいれないように、着色もしないようにということはやってましたけ
どね。だけど、愛情漬なんていう名前をつけてくれた子どもたちにたいし

では、本当にびっくりしました。なるほど、子どもたちの感性って、すごいですね。

原材料である野菜の収穫、調達からはじまって、漬物の製造、そして製品の販売は熊本市内ばかりではなく首都圏のデパートでも行われている。また、熊本県産品として広く紹介され、幕張メッセで開催された展示会にも出展し、山北と婦人会のメンバーは白の割烹着姿で製品の紹介に出かけている。商品開発は、山北が自宅の台所で、自らの創意工夫によって試行錯誤を繰り返しながら進めているのである。番組のなかでは、こうした山北と婦人会の活動を、映像を背景にしたナレーションを中心に紹介する。

【シーン4】

ナレーター：愛情漬の漬物は、地元の余った農作物を活用する発想から生まれました。今では、婦人会の漬物の材料として野菜を作る農家も増え、転作物に悩む農家を助けています。

(中略)

(工場での婦人会の作業の様子)

ナレーター：(中略) 作業を見ていて感じるのは、本当に手作業が多いということ。どんなに寒い冬でも同じです。機械を導入しても、肝心のところは、すべて手作業で行われます。大きな漬物石を扱うなど、危険な作業もありますが、身のこなし方もみなさん軽快です。味噌漬の味噌は、もともとから工場で作られ、大きな瓶に寝かせています。この仕事も重労働です。下村の漬物のかくし味は、球磨焼酎です。いろんなものに使われています。一回使ったお味噌は、もう一回、下漬のために使うなど、とにかく、すべてのものがフル活用されます。袋詰めも、一つ一つの野菜を丁寧に入れています。おふくろさんのぬくもりが、一緒に詰められていくようですね。しかも安全性には細心の配慮がなされています。真空パックしたものを、80度の熱湯につけ、熱処理します。0-157の、つけいるすきはありません。

仕上げの包装まで、一つ一つ丁寧に包み込まれていきます。愛情漬と名付けた子どもたちは、何度かここを訪れています。おばあちゃんの仕事ぶりを見て感じた、そのままを表現した言葉だったのでしょね。わずか15人で38種類の商品を作るのは非効率だという人もいるそうですが、山北さんは、余ったものを漬けてたらこうなっただけと淡々と話します。

山北：今は、ものは溢れているけども、そのなかに、その作る人の心がどれだけはいれるか、それを反映できるか、ですたいね。それしか、今から生き残るっていうことは、ないんじゃないですかね。そう思うわ、本当に。(熊本市内のデパートの食料品売り場や、首都圏のデパート、幕張メッセでの光景)

ナレーター：下村婦人会の愛情漬のファンは、全国各地に広がっています。消費者の声を直に聞くことが、山北流マーケティングです。口コミで広がり、個人的な注文が多いのですが、有名なデパートや大企業でも、大人気商品として扱われています。また東京や大阪のイベント会場での展示即売会などと、全国各地を飛び歩くことが、新しい商品の開発や、食生活の変化に対応する商品改良につながっています。

(山北家の台所)

ナレーター：38種類の商品開発の秘密は、ここ山北さんの台所にあります。山北さんは、休みの日や夜中を活用して、日ごろ思いついたことや、余った作物の利用方法をためています。

こうした婦人会活動と地域社会との関係についても、番組では住民へのインタビューによって描き出している。インタビューされているのは、男性ばかりである。

【シーン5】

ナレーター：婦人会は、地元ではどんな存在なのか、うかがってみました。
林田（住民）：減反せにゃいかんもんですから、全部が全部米作れんでしょ。

そこに、材料、ナスとか、大根とかですね。色々作って出荷して。

インタビュアー：それを婦人会に…

林田：そうです。全部出して。

牧野(住民)：婦人会に野菜を出して、その野菜を婦人会に買ってもらってですね、んで、地域の方も、やっぱり相当、あの、お金になったわけですよね。野菜を売って、そしてやっぱり両立したかたちで、やっぱり助けおうち、やってきたわけですね。

そして番組は、「地域づくり全国交流会議高岡大会」における、ビデオと山北のスピーチによる婦人会活動のプレゼンテーションと、国土庁長官賞と同大会実行委員会会長賞の受賞発表の光景、湯前町町長の談話、山北の談話、受賞を祝う平石、上村、辻田から山北への呼びかけの談話を連ねながら、次のようなナレーションで終わる。

【シーン6】

ナレーター：山北さんと下村婦人会の活動の原点は、いつも子どもへの愛情でした。同じ町に住みながら、農協の対立で二つに引き裂かれた戦後すぐの子どもたち。集団就職のため、町を離れていった子どもたち。70人の児童との6年間にわたる文通。そして未来を担う子どもたちのためにと愛情漬けて46年。山北幸さんと下村婦人会のみなさん、いつまでも現役で頑張ってくださいね。そして、いつもありがとう。

シーン1から3までは、婦人会をリードしてきた山北のいわば40年史といえよう。とりわけシーン1では、このテレビドキュメンタリーというテキストにおいて、下村婦人会の組織化の原理、活動原理、あるいは婦人会活動の意義を特徴づけるディスクールが編成されている。「農地解放で二つの農協ができ、その対立は子どもたちにまで尾を引いていました」というナレーションと、それに対応した「だから子どもたちが、やっぱり子どもたちが、やっぱ

一番かわいそうですよね」という山北の語りが、子どものために、この共同体の分裂を乗り越えようとする思いを表すディスクールとなっている。また、「お金がないからといって子どもを病院につれてこない母親たちをしっかりとばしながら、貧しい農民たちを暖かく支えてきました」というナレーションと、「貧しいんだもん、とにかく」という彼女の語りが、克服すべきもう一つの困難が貧しさであることを示すディスクールであろう。そして、「山北さんは、婦人だけでも一つにならなければと婦人会をつくりました」というディスクールによって、下村婦人会の組織化の原理が示され、「必要にせまられて、子どもたちの施設も次々とつくりました」というディスクールから、その活動の意義が浮き彫りになる。

1997年9月に実施した山北と下村婦人会のメンバーにたいする聞き取り調査¹からも、こうした経緯は明らかになる。山北は婦人会の設立当時の状況を次のように語っている。

とにかく、みんなが困ってるのが、(医院の)窓口からわかるわけなんですよ。窓口通して見たときに、本当にみなさんのご苦労がわかって。そして、あの頃に、何とか女だけでもまとまらなきゃって考えたのが、お母さんの立場ですよ。子どもさん連れてみえるでしょ。かねては隣近所でも口も利かないのに、子ども連れのお母さんだったら、「どんなですか？」ってお互いに声がかかけ合えるわけです。自分が早く来ていても、具合の悪そうな子どもがいたら、「私より先に診てもらいなさい」っていうようなことがあるでしょ。だから、やっぱり、なんとか女だけでも手をつなぐ方法はなかろうかと。もとはそこなんです。

当初、婦人会の活動は現金収入を確保することを目的とした「生活改善講」から出発している。ところが、その掛け金となるわずかな現金にも不自由する農家が少なからずあったことから、そのための現金収入を得るために、シュロの葉で作った蠅たたきや、ホウキ草から作ったホウキの製造、販売へと、

その活動を展開させていった。「必要にせまらてつくった子どもたちの施設」も、婦人会の発足期の「運動会用の鉢巻の製作」から始まって、購入した古書を学校へ寄贈した「仲良し文庫」といったものであったという。こうした事情にかんする、聞き取り調査²での山北の説明を紹介しておこう。

明日、お金が要るっていっても、お金がないでしょ。そんなのもみんな、お隣から貸してもらったりなんかしてる人もあるって聞いてましたし。1円何十銭でも、病院のお金が払えない人もあるもんですから。盆とか暮れとかに、こっちもいただきにいかなきゃいけない。こっちも、闇ででもサルファ剤とか買わなきゃいけないくらいなんで、お金なしじゃ始まらないし、……（中略）……そんなこんなで、結局、貧乏物語からののはじまりですから。

（鉢巻を）持ってない子どもがだいぶいたんですよ。だから、鉢巻作って、学校にあげたんですよ。だいたい、スタンダードの英語の辞書さえ中学生が持ってなかった。だから、それを買って文庫を作って備えてやったんですよ。熊本の緑書房とか熊本書院とかいう古本屋さんで、……（中略）……少年少女文学全集とか世界のあれを20冊くらい買ってきて、重たいのを持って。そんなことをやりました。

農業協同組合の分裂によって地域共同体までもが分裂の危機に直面し、そうした社会関係の軋みが子どもの生活にまで影を落とし、しかも農家の暮らしは現金収入が乏しく、病気の子どもに医師の診察を受けさせることすらままならないという、敗戦後の農村に固有の困難こそが、この地域の重要なイシューの一つであったといえよう。このイシューをめぐって形成された女性のネットワークがこの下村婦人会であったと考えることもできる。そして、山北と婦人会のメンバーたちが求めたネットワークの組織化と活動の原理を、「子どもにたいする母親の思いと、その一生懸命さ」であったとするディ

スクールが、当時を回顧する山北の語りにおいても、またテレビドキュメンタリーのテキストにおいても成立しているのである。

そして、少なくともこの時期にあっては、婦人会の活動それ自体もいまだ模索の段階であって、具体的な活動の内容も、「生活改善講」や生活用品の製造、販売などの現金収入の確保を目指すものと、学習用具にも事欠く子どものための活動とが交錯していたようである。当然それは、今日、注目を集めているような特産品の製造、販売とはかけ離れた活動であり、そうした活動の原理を示すディスクールは、現代の地域社会の人びとの、物質的にはある程度は充たされた生活にかかわるディスクールとの対抗的關係によって、物質的な困窮と、それに対処していく工夫や知恵、あるいは努力を基調とする物語すら成り立たせる。このような観点からすれば、山北が当時を回顧して語るとき、頻繁に用いる「貧乏物語」という表現は、けっしてたんなる彼女の「語り口」なのではなく、これまで幾度となくメディアを通じて語り続けてきた彼女のディスクールが、メディアテキストにおいて一つの「物語」(narrative)を構成するにいたったと考えることもできよう。そしてさらに、「町おこしなんて、そんな大それたこと考えてませんわ、はじめから」という山北の明解な言明を一つの結論づけとするかたちで、婦人会の草創期にあって、その活動の意味は「地域おこし」などとはまったく無縁であったとするディスクールが成立している点にも注目する必要がある。

2. メディアテキストとディスクールの諸相

シーン2と3では、『暮らしの手帖』というマスメディアによって山北と下村婦人会が全国に紹介されたことがきっかけで、ネットワークが拡大し、さらにまったくの偶然から知り合った横浜の子どもたちとも、文通を重ねることで新たなネットワークを形成、拡大させていく、山北の生活世界の特徴と変容が描き出されている。それと同時に、1970年代から80年代を経過した山北のライフステージの変化による、このネットワークの意味の変容もまた示唆されているのである。シーン2で、平石は山北の表情と心遣いをもって、

関係的存在としての彼女の意味を「お母さん」として語り、シーン3では山北が、横浜の子どもたちとの関係的存在としての自らの意味を、繰り返し「おばあちゃん」として語っている。ここから、山北と彼女をリーダーとする婦人会の活動、あるいはそこで生産される市房漬をはじめとする各種の製品を、「お母さん」、「おばあちゃん」の「愛情」によって意味づけようとするディスクールが編成されているのである。これは、『「愛情」漬けて46年』というタイトルにもなっており、このテレビドキュメンタリーの一つの重要なモチーフを成立させているディスクールであることはいうまでもない。

このドキュメンタリーに25年も先立って、山北と下村婦人会、その活動とその所産の一つである市房漬を全国に知らしめた『暮らしの手帖』のテキストでは、たしかに、「お母さん」と「愛情」へと意味を収斂させるディスクールが編成されている。そして平石が、この『暮らしの手帖』の読者として山北を知り、独り旅で湯前町に山北を訪ねて以来、彼女を「お母さん」と意味づけることを可能にする相互の関係は継続している。そうした経緯を紹介するこのテレビ番組は、『暮らしの手帖』にたいしては第二次的テキストであり、シーン2で編成されるディスクールは、もっぱらこうした「お母さん」の表情や心遣いを強調するものである。しかし、第一次的テキストとして見た『暮らしの手帖』においては、山北と婦人会の活動をめぐるより多層的な意味も可能であったであろうし、「お母さん」や「愛情」といった意味だけには収斂しないディスクールも見出される。また、読者にとってもさまざまな意味の読みが可能であったであろうし、平石にしても、読者として、そうした読みが可能であったはずである。

1970年12月に取材が行われ、翌1971年2月の『暮らしの手帖』では、巻頭の15頁を山北と下村婦人会の紹介に当てている。1頁目では、婦人会の作業の様子を撮影した写真を背景に「このすばらしき井戸端会議」という見出しだけを掲載し、続く14頁分は、上から4分の1程度のスペースだけに記事の文を載せ、残りのスペースは、すべて見開きの写真を掲載している。最初の見開き写真は湯前町下村地区から臨んだ朝霧のなかの市房山の写真、続い

て、婦人会のメンバーが公民館の共同炊事場でクリスマスケーキを作っている場面の写真、次の写真はメンバーが川で野菜を洗う光景、その次には、売店の店頭と並ぶ、「湯前名産、市房漬」と印刷された包装紙につつまれた市房漬、その次の見開きでは、市房漬製造の作業風景と、市房漬と、山北のポートレイトがコラージュされ、次の写真では、広場にある婦人会が寄贈した施設の周辺で遊ぶ子どもたちが描かれ、そして最後の写真は、山々と点在する家屋を背景にして広がる冬の田畑のなかを、リヤカーを引き、一輪車を押して歩く、割烹着姿の婦人会のメンバーたちを写し出している。

掲載された写真だけに注目して見ても、そこには映像テキストが成立しており、多層的な意味が織り成されながらも、同時に、ある種の物語も構成されている。山々を背景にした朝霧の立ち込める農村の風景は、高度経済成長の末期となった1970年代初頭であっても、日本の農村の典型的な風景であり、日本の多くのオーディエンスにとっては、「故郷」の風景のステレオタイプといってもよいであろう。農村の婦人たちが集まってクリスマスケーキを手作りする光景は、意外でもあると同時に、洋菓子店から買ってくるのではなく、婦人たちが集まって、何やらお喋りに花を咲かせながら、労を惜しまずケーキ作りに励んでいる姿から、「お母さん」の「愛情」という意味が読み取れるかもしれない。一転して、川で野菜を洗う光景は、しだいに見かけることは少なくなったものの、「懐かしい」農村風景のステレオタイプでもあり、「故郷」の「お母さん」たちの映像のステレオタイプでもありうる。店頭と並ぶ「市房漬」は、それを知らない読者にとっては、ほとんど意味をとらえることができないが、それに先立つ一連の映像のシークエンスから、あの婦人たちが漬けた漬物かもしれないといった程度の推測はできなくもない。そうした推測は、次のコラージュによって確かな読みへと変えられ、あるいは、コラージュから前の写真へ戻って、婦人たちが手作りした漬物であると理解されることになるだろう。また、手作りの共同作業で漬物作りをする婦人たちの姿から、「懐かしい」「故郷」の「お母さん」という意味を読み取ることもできるであろうし、作業が重労働であるといった読みも可能であろう。た

だ、こうした作業の所産が「市房漬」であり、キーパーソンが山北幸という婦人であることには、コラージュのどのような読みも、ほぼ間違いなくたどりつくはずである。広場の風景からは、ほとんどの読者は明瞭な意味を読み取ることができずに、むしろ、他の写真との関係の意味をとらえたいという関心や問いが喚起されるであろう。そして最後の見開き写真で再び、「懐かしい」「故郷」の「お母さん」を見せることで、この映像テキストは結びとなる。

写真の上のスペースに綴られた記事の文は、言語テキストとして多層的意味を可能にしながらも、R. バルトの指摘するとおり、映像記号がその多義性によって提起する「これは何か」という問いかけに答え、あるいは、映像記号によって意味されるもの (signifié) の自由にたいする「制御」や抑圧的な価値を及ぼしている (Barthes [1982=1984: 31-34])。最初の見開きの写真にたいして記事のテキストは、読者の私的な読みから喚起される、地理的には同定されない、象徴的な「故郷」の風景という意味を排して、この風景が、「熊本県球磨郡湯前町下村」であると特定する。そして、続く記事では、この婦人たちが、一人で作っていたのではうまくいかないケーキ作りも、「いっしょにやっと、ようでくるもんなあ」(『暮らしの手帖』[1971: 9])と語る婦人たちであることを強調する。川で野菜を洗う光景と、店頭に並ぶ市房漬の写真にたいしては、山北の「貧乏物語」とほぼ同様の、下村婦人会と山北の歴史を物語るテキストが成立している。ここでは、物語の記事のテキストが担い、写真は映像記号として、「属詞的な情報、範列的な範疇の情報(登場人物のステレオタイプ化した状況)を引き受ける」(Barthes [1982=1984: 34])。すなわち、「貧乏物語」の苦労を経験した「懐かしい」「故郷」の「お母さん」の典型的な姿が、写真によって意味されているのである。そして、この「貧乏物語」の一つの結末が店頭に並ぶ市房漬というわけなのだ。このように、『暮らしの手帖』のメディアテキストの前半においては、「熊本県球磨郡湯前町下村」を舞台とする、山北と下村婦人会、そして市房漬をめぐる、今日にいたるまでの「貧乏物語」を成立させ、その登場人物たちをめぐるのは、苦労を続けながらも、それに共同で対処してきた、「懐かしい」「故郷」

の「お母さん」という意味を可能にするディスクールが編成されているのである。

カラージュされた写真にたいする記事は、市房漬製造の作業手順の説明がほとんどであるが、それに続いて次のような文が展開している。

防腐剤を使えばいいのかもしれないがそれはしたくない

人工着色をすれば、色の白い作りたての味噌でもいいのかもしれないが、そんなことはしたくない

たくあんを漬けるのに、サッカリンを使っているから、味噌漬にも、そうしたらいいのかもしれないが、味噌漬はからいのが身上だから、それもしたくない

それでがんばっていたら、昨今はこれこそ自然食品だといわれましてね、と山北の奥さんは、わらっていた(句点がないのは原文のまま。『暮らしの手帖』〔1971：15〕)

下村婦人会の市房漬製造過程では、防腐剤、人工着色料、人工甘味料などの食品添加物は使われず、市房漬は「自然食品」とするディスクールがここに編成されている。前半のシークエンスに続けてテキストを読むなら、「懐かしい」「故郷」の「お母さん」が手作りしたものには、問題の多い添加物など使われていないし、そこにこそ「お母さん」の心遣いや「愛情」があるという意味も、もちろん可能である。したがって、カラージュの読みからは、手作りの共同作業や重労働をも厭わない「お母さん」の「愛情」に加えて、食品添加物を使わない「お母さん」の「愛情」という意味も加わるであろうし、市房漬の写真が、その集約的所産を可視的に意味するものとなり、山北の写真がその実践者を意味するものになりうる。ただ、ここでとく注目すべきは、「お母さん」の「愛情」というコンテクストに連なりながら、さらに市房漬を「自然食品」とした、『暮らしの手帖』というマスメディアのテキストにおいて編成されたディスクールの社会的、文化的、ないしは歴史的特

性である。

1969年には、その時期に汎用されていた人工甘味料のチクロの有害性が明らかになり、また当時のNHKの生活情報番組であった『生活の知恵』で、市販されている多くの食品が、さまざまな食品添加物を含んでいることが報じられるなど、『暮らしの手帖』が下村婦人会を紹介した1970年代前半の日本では、食品添加物が社会問題化していた。さらに、国民世論においては、こうした食品添加物問題だけにかぎらず、より広範な問題として、日本人の健康な生活と身体を直撃する公害や自然破壊が、高度経済成長の負の結果としてとらえられるようになり、経済成長よりも環境保護を求める人びとが、この時期に増えはじめた(NHK放送世論調査所編〔1983：192-199〕)。まさに、こうした当時の世論の動向も含めた社会的ディスクールと意味的に連動したディスクールが、『暮らしの手帖』のテキストにおいても編成されているのである。そしてまた、読者の読みにおけるこの種のディスクールも、テキストの多層的意味のなかから、「自然食品」としての市房漬という意味を顕在化させることになる³。

さらに、この『暮らしの手帖』が、花森安治の「大政翼賛会の宣伝部に籍をおき、戦争遂行の旗をふったという戦中の花森の、自分自身に対する深い悔恨」(天野〔1996：36〕)と、「戦争に巻き込まれたのは、自分を含む民衆の一人ひとりが守りたい自分の暮らしを創ってこなかったからだという、戦中体験の『記憶』」〔37〕を起点として創刊されていることも想起する必要がある。当時のメディア環境のなかで、このような雑誌で紹介されたことが、「市房漬」、「山北」、「下村婦人会」をめぐる、他の雑誌、たとえば、1970～71年に相次いで創刊された『an an』や『non-no』などで紹介された場合は決定的に異なる、メディアのもたらす記号としての意味作用を成立させたのである。

聞き取り調査⁴に応じて、山北が、当時の状況を次のように語ったことはじつに興味深い。

あの（『暮らしの手帖』の記事の）なかで、花森先生が、「自然食」って書いてくださったの。私たちは今でもそうだけど、あの頃は防腐剤なんか使い道知らなかったんですよ。昔からのやり方で、焼酎やなんかをお味噌のなかに混ぜて使ってたのをまねして、焼酎をお味噌の中に入れて漬けはじめたんですよ。そのアルコール分が混じってるからカビ止めになるってことも、全然知らないで、おばあさんやら母たちがしてることを見よう見まねでやっただけなんです。それを「自然食」っていう、いろんなものを混ぜないでって書いてくださったの。

いろんなものを混ぜたら、やっぱりあれだけ書いていただいたのに嘘になるでしょ。だから、本当の自然食品っていうのに、私たちはこだわりをもたなきゃいけないと。今、守ってるのはそこなんです。着色もしていないし、防腐剤もしないっていうのは、そこなんです。食品としてごまかしのないこと。『暮らしの手帖』の生き方ですよ。

今でも物産展にいったら必ず覚えててくださる。『家の光』にも2回くらい出たんですが、『家の光』を見たっていう人はいない。東京なんかで漬物に熱心な方は、わざわざ『暮らしの手帖』をこれに載ってましたねって見せてくださる。あの頃、珍しかったんですよ。今のね、熊大の教育学部の女の先生も、『暮らしの手帖』のあの記事を読んだときほど自分は感激したことないっておっしゃって。非常に反響をよんだんです。

この山北の説明は、当事者の問題意識や意図とはまったくかわりなく、メディアテキストにおけるディスクリールこそが、市房漬を「自然食品」と意味付け、下村婦人会の活動を、そうした製品を生産する活動として性格付けていったことを明らかにしている。すなわち、1971年の『暮らしの手帖』による紹介が、いわば一つの転換点となって、市房漬も、下村婦人会も、その意味と活動の性格とを大きく変容させていったのである。まさに、この転換

は、メディアテキストにおけるディスクールが、かつての「貧乏物語」を背景化させ、身体に良い「無添加」の「自然食品」としての市房漬と、それを生産する婦人会活動という意味を顕在化させたということにほかならない。しかも、紹介したマスメディアが『暮らしの手帖』であったがゆえに、当時の日本のメディア環境においては、こうした意味はより一層強化されたともいえよう。そして、メディア環境のなかで市房漬は、「懐かしい」「故郷」の「お母さん」の「愛情」——山北と下村婦人会の活動——の所産であり、健康な身体と生活に寄与する「無添加」の「自然食品」——昔からそうした製法であった——という、多層的な意味作用をもちうる「記号としてのモノ」となっていったのである。

テレビドキュメンタリーのシーン3に現れる、辻田の「何も添加物が入ってなくて、すごいいい」、「すごいからだにもいいんだ」、山北の「あの子どもたちが、おばあちゃんたちが作っている漬物は、自分たちの健康を考えてって、とてもじゃないですよ」、「防腐剤とかなんとかいれないように、着色もしないよ」ということはやってみましたけどね。だけど、愛情漬なんていう名前をつけてくれた子どもたちにたいしては、本当にびっくりしました」といった語りも、『暮らしの手帖』の延長上の第二次的テキストで編成されたディスクールである。これらに、上村の「おそらく山北さんが、本当にあの気持ちこめて作っている漬物だろうってことで、タイトルが愛情漬」というディスクールも含めて考えるなら、『暮らしの手帖』以来、今日まで連綿と続いてきた一連のディスクールこそが、市房漬をして「記号としてのモノ」に変態させてきたディスクールなのだ。

むしろ、第二次的テキストであるテレビドキュメンタリーでは、1970年代後半から1980年代のわが国における消費社会化の進行に対応するかのようにより、「お母さん」、あるいは「おばあちゃん」の「愛情」であるとか、「自然食品」といった「記号としてのモノ」の意味作用を顕在化させるディスクールが編成されていると考えられる。シーン3で取り上げられている、山北と横浜の子どもたちとの交流も、まったくの偶然を契機として、山北が熱心な文

通を続けてきたがために継続している。しかし、そうした山北の生活世界のパーソナルな特徴を述べるよりも、下村婦人会の製品を、「健康や身体に良い」「自然食品」という意味作用を成立させる、「記号としてのモノ」へと変容させるディスクールが見て取れる。シーン4でも、同様のディスクールが、効率を度外視して多品種生産を進めていることを示すナレーションや、「今は、ものは溢れているけども、そのなかに、その作る人の心がどれだけはいれるか、それを反映できるか」という山北自身の語りから編成されているのだ。これらは、多品種少量生産が消費における多様なニーズを充足し、消費過程における欲求充足が「物から心へ」とシフトするという消費社会のイデオロギーを生成させながら、そうした可能性を演出する「記号としてのモノ」を成立させるディスクールになっているともいえよう。そして、少なくともシーン3と4では、こうしたディスクールが、かつての「貧乏物語」を潜在化しているのである。

『暮らしの手帖』の後半を読み進むと、広場で遊ぶ子どもたちの写真にたいしては、言語テキストである記事の文が、まさしく「これは何か」という問いかけに答えを与えてくれる。「13アールの〈こども遊園地〉を、「婦人会が、味噌漬を売ったその金で、「女の手だけで、作った」(『暮らしの手帖』[1971: 16])というのである。いうまでもなく、これは写真を説明するだけの文ではない。そこには、下村婦人会の漬物製造という活動がもたらす、地域社会への効用を説くディスクールが現れているのだ。「お母さん」の「愛情」が組織した婦人会の活動は、もはや鉢巻きや古本の文庫を寄贈するといった「貧乏物語」を脱却して、遊園地を作るところまでに発展した。しかも、それを担ったのは女性だけである。「いつまでも奉仕にたよってはいけない」[17]なので、「すこしでも余裕ができれば、わずかでも日当を払わなければ」[17]ということで、1968年から「味噌漬の仕事に、日当を払えるようになった」[17]のである。わずかな現金にも不自由していた「貧乏物語」から、「お母さん」の「愛情」のネットワークを形成することで、地域にさまざまな施設や設備を寄贈し、自らの現金収入も確保できるまでになったという、物語の

輝かしい結末を導くディスクールがここに編成されている。

さらに、最後の見開き写真にたいするテキストでは、下村婦人会の活動の、地域経済への貢献までもが述べられている。

この下村は、これまで、米作一本でやってきた、野菜を作りたくても、
かんじんの水が足りないのである
それが、いきなり米を作るな、である
田んぼをへらして、ほかのものを作れときた
どうするか、亭主がぶすつと考えこんでいる傍で、女房が、みそ漬の野菜
はなんぼあっても足らん、といった
それにきまった〔18〕

当時の政府の減反政策は、米作り農家に転作を強い、農家は転作作物に悩んだ。そうした農村の窮状をも克服しうる経済的貢献を、この婦人会の活動がもたらしたという物語の結末が、このディスクールによって構成されるのである。あるいは、このような物語を成立させるテキストからは、農村における女性の、とくにその経済的地位の向上といった意味を読み取ることもまた可能であろう。いずれにしても、『暮らしの手帖』の後半のテキストでは、下村婦人会の活動を、この地域のさまざまな困難を乗り越える方途を拓いてきたばかりではなく、地域社会における人びとの生活を活性化させ、その可能性を開発し、地域を振興させるものとして意味付けるディスクールが編成されているのだ。このように考えるなら、最後の見開き写真に描かれた婦人会メンバーの姿は、テキストにおいて構成された物語の、その大団円における「属詞的情報」としての、下村婦人会の勇姿にほかならない。

二次的テキストとしてのテレビドキュメンタリーのシーン4にあっても、農村の地域経済にたいする下村婦人会の活動の一定の効果を示唆するディスクールと、さらに、山北と婦人会による商品開発と販売促進活動の結果、製品が地域の特産品として成功したことを示唆するディスクールが見出

される。つまり、婦人会の生産する漬物は、「地元の余った農作物を活用する発想から生まれ」た製品であって、それが「有名なデパートや企業でも、大人気商品として扱われ」るようになると、「婦人会の漬物の材料として野菜を作る農家も増え、転作作物に悩む農家を助け」ることになるという物語が、こうしたディスクールから構成されるのである。その点で、シーン5の地域住民、おそらくは転作による野菜生産農家の談話は、地域経済への効果を裏付けるディスクールといえるであろう。そして、東京のデパートの地下食品売場に並べられた多種類の製品の映像こそが、「大人気商品」となった特産品としての成功を、リアルに裏付けるというわけである。また、シーン3における、横浜の子どもたちの製品にたいする賛辞も、「大人気商品」であることの、いわば傍証となるディスクールでありえよう。こうしてみると、製造工程を説明する——手作業を中心として、野菜ばかりではなく、球磨焼酎のような地元産品を使い、すべての材料をフル活用して、袋詰めや包装も心を込めて丁寧に行うという——ナレーションも、商品開発が日常的な創意工夫による——山北が自宅の台所で試行錯誤的に行う——ものであることを説明するナレーションも、「記号としてのモノ」を成立させるディスクールであるばかりではなく、消費社会にあって、地域経済に貢献しうる地域の特産品を創り出す手法を示唆するディスクールであるとも考えられる。

『暮らしの手帖』のディスクールは、当時の農政にたいして批判的な世論という社会的ディスクールに連動したり、また、地域社会における女性の地位向上といったコンテキストに沿ったり、あるいは花森の「民衆の手による暮らしの創造」という編集方針を踏まえることによって、テキストと読みとの多層的な意味を可能にしつつも、物語の結末を構成するディスクールであるといってよいだろう。また、テレビドキュメンタリーのディスクールも、結局のところシーン6では、山北らの試みを、敗戦以来の日本の農村が経験した、歴史的段階のそれぞれの特徴に応じた「子どもへの愛情」の所産とするナレーションで終えている。

たしかに、『暮らしの手帖』もテレビドキュメンタリーも、山北らの活動を、

ことさらに「地域おこし」、「地域づくり」の活動として意味付けるようなディスクールの編成してはいない。しかしながら、第一次テキストとしての『暮らしの手帖』の物語の結末を構成し、第二次テキストとしてのテレビドキュメンタリーの、とくにシーン4から5へといたる一連のディスクールの、次のようにとらえることもできよう。すなわち、これらのディスクールは、必ずしも明示的ではないものの、今日の「地域おこし」や「地域づくり」にかかわる社会的ディスクールと連動した読みや、あるいはそうしたコンテキストでの読みによって、メディアテキストの多層の意味の一つとして、婦人会活動を、「大人気商品」となるような特産品の開発、生産、販売を行う「地域おこし」の活動として意味付け、そうした意味を顕在化させるディスクールでもありうるのだ。

3. 「地域おこし」のディスクールによる資源動員

『暮らしの手帖』でも、『「愛情」漬けて46年——山北幸と下村婦人会・湯前町——』と題した地域向けのテレビドキュメンタリーでも、明示的な「地域おこし」、「地域づくり」のディスクールは見当たらない。むしろ、自らの活動を意識的に「地域おこし」から距離化するような山北の言明のほうが鮮明であるといってもよい。とくに、このテレビドキュメンタリーの全体の流れを見るなら、それは、すでに述べたように、山北幸という一人の女性がその半生を通じて展開してきた地域活動の足跡をたどった、いわば「山北幸物語」を前景化させたメディアテキストであり、そこでは、「地域おこし」ではなく、地域に暮らす「人」とその「活動」、あるいは「生活」が描かれている。制作に携わった岸本晃への聞き取り⁵からも、こうした制作の意図は明らかである。岸本は番組制作のねらいについて、次のように述べている。

やはり「人」ですね。いろんな地域おこしとか町づくりとか、あっちこっち行くけど「人」だ「人」だと皆おっしゃるけれど、リーダー一人の人がしっかりしてるってことでしょね。横浜の子どもたちのことも、はっき

りいっちゃうと、山北幸という人が子どもたちとつながったってことなんですよね。下村婦人会がどうってことじゃない。『暮らしの手帳』っていうのも、山北幸が編集とつながって、長い人と人とのつきあいをしたから、いまだにある。

ところが、このテレビドキュメンタリーの制作の過程には、こうした制作者の意図やねらいとはまったく異なるコンテキストが成立している。番組の放送に先立つ1996年11月27日付『朝日新聞』の熊本版によれば、「四十年以上にわたる漬物製造により、国土庁長官賞と同大会（地域づくり全国交流会議高岡大会）実行委員会会長賞を受賞した湯前町の地域おこしグループ『下村婦人会』（山北幸会長ら十五人）のテレビドキュメンタリーづくりが進められている」（傍点・引用者）というのである。この記事は、さらに続けて、「同町が、同婦人会の生い立ちや功績など、活動の姿を映像化し、今後の地域おこしに役立てようと、KAB熊本朝日放送の協力でつくる」（傍点・引用者）とも報じている。つまり、湯前町が制作費を負担し、提供したのがこの番組——実際の放送に際して、他のスポンサー企業のコマーシャルは一切挿入されなかった——であり、その政策的なねらいは、あくまでも「今後の地域おこしに役立てよう」という点にあったということなのである。しかも、この新聞記事というテキストにおいては、テレビ番組のテキストとは対照的に、山北と下村婦人会を「地域おこしグループ」として位置づけ、その活動と歴史を「地域おこし」のそれとして性格づけるディスクールが明確に編成されていることも見逃すわけにはいかない。

この新聞記事は、テレビドキュメンタリーにたいしては第二次的テキストであり、『暮らしの手帖』から見れば、同じ山北と下村婦人会を紹介した点で、時間的な隔たりはあるものの第三次的テキストである。ところが、そこでの「地域おこし」のディスクールは、下村婦人会を「今後の地域おこしに役立てよう」とする自治体としての湯前町の政策と、そうした政策にかかわる当事者の言明だけを、ほとんどそのままに記述したマスメディアとしての『朝

日新聞』が、それらの政策当事者と、いわば共同で編成したものであるともいえよう。そしてこうしたテキストでは、下村婦人会は「地域おこしグループ」であり、湯前町という自治体においてそのように位置づけられ、それにふさわしい功績もあり、その活動が湯前町の「今後の地域おこしに役立て」られようとしているという意味が可能になるのである。

湯前町が独自に制作した広報メディアの多くにも、下村婦人会とその製品が紹介されている。それらのいずれにあっても、婦人会は「地域おこし」活動の担い手であり、製品は湯前町の「特産品」であるとするディスクールが、明示的に編成されているのである。湯前町役場企画振興課の発行した『1996湯前町町勢要覧』は、全32頁がカラー印刷の冊子であるが、20～21頁の「イラストマップ」と、28～29頁の「特産品」で、下村婦人会とその製品を紹介している。とりわけ「特産品」では、紹介記事の冒頭で、「本町には、全国の地域興しの先駆者と言っても過言ではない、下村婦人会市房漬加工部の『市房漬・からし漬・きりしぐれ・大豆そぼろ』など三十八品種にもおよぶ多くの人気商品があり、農林水産大臣賞を始めとする数多くの賞を受賞している」（傍点・引用者、『1996湯前町町勢要覧』〔28〕）と述べている。そして、次の頁（29頁）の下半分のスペースのすべてを使って、婦人会の「市房漬加工場」の写真、婦人会の作業風景の写真、製品の写真を掲載しているのである。また、同じ企画振興課の発行した観光客向けと思われるパンフレット『ゆのまえ』でも、「特産品」として、「地域興しグループである下村婦人会市房漬加工部の『市房漬・からし漬・きりしぐれ・大豆そぼろ』」（傍点・引用者）を紹介し、「ゆのまえ漫遊ロードマップ」に下村婦人会の加工場の位置を表示している。

これらの、自治体としての湯前町の施策を色濃く反映したメディアテキストにおいて編成されている「地域おこし」のディスクールには、どのような特徴があるのだろうか。なによりも、すでに「人気商品」として広く販売されてきた下村婦人会の製品を、「湯前町の特産品」として特定の意味付け、さらにこれもまた、すでにいくつかのマスメディアによって広く紹介されて

きた下村婦人会の活動を、「湯前町の地域おこしグループ」として意味付けるディスクールが編成されている点に注目する必要がある。『町勢要覧』のなかの「全国の地域興しの先駆者」というディスクールは、結成以来50年近くにわたるこの婦人会の歴史も包摂して、このテキストにおいて、次のような意味を可能にする。すなわち、湯前町では50年近くもの間「地域おこし」の活動が展開しており、そうした活動が生まれ、育まれた湯前町、そうしたグループが活動する湯前町、さらには「地域おこし」の活動の先進地としての湯前町といった意味である。また、すでに下村婦人会を紹介したメディアテキストの延長上でこうしたテキストが読まれるとき、全国に広く知られた下村婦人会が「地域おこし」の活動を展開している湯前町という意味も可能になる。

すなわち、下村婦人会を、近年になって頻繁に見聞きされるようになった、その点では、いわばモードとしての「地域おこし」の、その先駆者にしようとする政策的なディスクールこそが、『町勢要覧』などのメディアテキストにおいては、湯前町の「地域おこし」政策に、時間的広がりのある意味を可能にするのである。また、マスメディアで何度も紹介されながら、ネットワークを拡大してきた下村婦人会の活動とその成果を、人気商品にして湯前町の特産品を製造する「地域おこし」の活動にしようとする政策的なディスクールは、同様のメディアテキストにおいて、湯前町の「地域おこし」政策に、空間的広がりのある意味を可能にするのである。かくして、下村婦人会の「貧乏物語」の歴史も、市房漬の「自然食品」という「記号としてのモノ」の意味作用の拡大も、こうしたメディアテキストにおいて編成されるディスクールによって、湯前町が「地域おこし」政策を推進するための、さらにはそうした政策によってこの地域からの情報発信を行うための一つの重要な資源へと変容させられていくのである。

湯前町では、1990年代の初頭から、地域の振興、活性化、あるいは開発を目指す政策として、観光開発が進められてきた。人口約5500人、年間の予算規模が約33億円で、これまでにとくに目立った観光資源もなかったこの小さな地方自治体が、新たに観光開発を進めていくためには、当然、従来とは異

なる観光資源の開発と、それに関連した地域情報の形成と発信が必要となる。こうした課題に応えるべく、1991年には、同町出身の漫画家である那須良輔を記念した「湯前まんが美術館」を建設し、ここを拠点にして、毎年秋には「国際マンガ・食・健康フェスティバル」というイベントを町の主催で開催してきた。また、町内の潮地区では、キャンプ場とコテージを中心に、山の散策や山里の生活を体験しながらの宿泊観光を可能にする、体験型の滞在施設「ゆのまえグリーンパレス」の開発を進めてきたのである。1996年からは、同じ潮地区の開発をさらに進め、地元農産品の加工体験施設を設けた温泉宿泊施設「湯楽里」が1998年3月に完成している。

このような観光開発事業の注目すべき特徴は、「体験型」、あるいは「交流型」とよばれる観光の形態と結びつけられて、地域住民の「地域おこし」の活動が、新たな観光資源として重要な位置を占めるようになってきているという点である。「湯楽里」では、農業協同組合婦人部を母体とする女性の「地域おこし」グループが、地元の農産品を活用した薬膳料理の提供や、農産品の加工体験施設の運営に携わっている。湯前町がこのようなかたちで進めようとする観光開発政策の方向性とねらい、そして課題が、同町役場企画振興課への聞き取り⁶から浮き彫りになってくる。

いかに、今からPRしながらお客さん呼び込むかというのが一番大きなところじゃないかと思います。というのが、各町村同じような施設をどこでも作っているんですよ。阿蘇の方に行きますと、各村ごとに、ここまでは別としても、町ごと村ごとに作ってますから。ですから湯前町が何をメインとしてっていくのか、要はサービスとそれから地元でとれたものの産品、産物の提供、そういうものではないかと思うんですけどね。……(中略)……それと、体験が出来るような施設を作ってやらないといけないなど。いろんな体験がですね。ここにも体験(のできる施設)を入れてますけど、今度は自然の体験が出来るようなものをですね。すでに、炭窯を作ってるんですよ。ですから炭焼の体験は、今は、都市山村交流のなかなか

どで子どもたちに体験してもらって、炭を持たせたりしてるんですけど。そういった、いろんな体験ができるようなものを、また作ってやらないといけないんじゃないかと思うんですが。

すなわち、観光客を誘致するために、湯前町の特色などの地域情報を形成、発信していくこと——「PRしながらお客さん呼び込む」こと——が、この観光開発の一つの方向性であると同時に、課題であるともいえよう。そして、他の地域とは異なる、湯前町ならではの観光開発を展開していくこと、——たとえば、「地元でとれたものの産品、産物の提供」や、「体験が出来るような施設」を設置、運営すること——が、もう一つの方向性にして課題である。さらに、地元産品の提供や、山里の暮らしや農産品加工の体験を通じて、地域住民と観光客との交流が可能になること——たとえば、「炭焼の体験」のように、「都市山村交流のなかなどで子どもたちに体験してもらって」、「いろんな体験ができる」こと——もまた、この観光開発の重要な方向性と課題なのである。まさに、こうした方向性と課題に応じた観光開発を推進していこうとするとき、独自のネットワークを形成、拡大することによって広範な情報発信が可能で、しかも地域生活に根付いた活動を展開することによって地域特性や地域文化——具体的には、地域の特産品や景観、あるいは生活習慣や風俗など——を創出、育成し、そうした活動を通じての地域外との交流も可能な「地域おこし」の活動とグループの存在こそが、きわめて重要な資源となる。

湯前町の観光開発政策からすれば、下村婦人会の活動と成果こそが、まさしく「地域おこし」グループのそれとして意味付けられることによって、最重要の資源になるといってよい。山北と下村婦人会が形成、拡大してきたネットワークの広がりや、地域からの情報発信に十分なものであるばかりではなく、その活動と成果のもつ意味は、時間的、空間的な広がりのある地域情報それ自体の形成も可能にするであろう。もちろん、この婦人会の製造する製品は、地元の農産品を活用したもので、その点で湯前の「特産品」というこ

とができるし、これまでも多くの見学者が訪問してきたことから、この「特産品」の製造過程の見学や体験も可能になるかもしれない。しかも、こうした活動を通じて、訪問客との交流とその維持が蓄積されてきたことから、観光客との交流が期待できる。

このような、いわば政策的期待が下村婦人会に向けられ、「地域おこし」グループと意味付けられるとき、たんに婦人会の製品が「特産品」として資源化されるだけではなく、婦人会活動の歴史も、活動形態も、その実績も、あらゆる要素の観光資源としての動員が始まるのである。そして、観光開発にかかわる、とりわけ自治体としての湯前町の開発政策を広報するメディアテキストにおいて編成される「地域おこし」のディスクールが、下村婦人会を明示的に「地域おこし」グループとして意味付け、その活動の成果を、全国に知られた人気商品の「特産品」と意味付けるのである。そればかりではなく、この「地域おこし」のディスクールによる意味付けの過程では、他のメディアテキストにおいて成立してきた、下村婦人会をめぐる「貧乏物語」、「愛情物語」も、その構成要素となったさまざまな意味も、あるいは「自然食品」という「記号としてのモノ」の意味作用も、観光開発というコンテキストに収容され、観光資源化され、観光資源として動員されるのだ。

「湯楽里」の1998年3月の開業を告知するために、同じ湯前町役場企画振興課が制作したパンフレットには、「湯前町ならではの山里の食文化を、体験し味わう『手づくり体験』」という見出しのついた、次のような注目すべきテキストが展開している。

湯前町の下村地区の婦人会が作る「市房漬け」は、全国の手作り製品の原型とも言われています。

婦人会の地域づくりの活動は、平成8年度に国土庁長官賞を受賞しました。

「湯楽里」の2階の農産加工体験室では、漬物をはじめ様々な手作りの体験を楽しんでいただけます（傍点・引用者）。

そしてここにも、婦人会の作業風景と、製品の写真とが挿入されている。かくして、このパンフレットというメディアテキストでは、「手作り」と「地域づくり」にかかわるディスクールが編成され、映像記号までもが織り込まれることによって、下村婦人会と市房漬が、「湯楽里」という温泉宿泊施設を中核とした観光開発のための資源として、見事なまでに動員されているのである。ところが、湯前町の各方面への聞き取り調査から明らかになったことは、「湯楽里」のある潮地区と下村地区とが遠距離であるため、とくに高齢者の多い下村婦人会からは農産加工体験室に毎日メンバーを派遣することができず、当の下村婦人会が農産加工体験室の運営には参加していないという実態である。もちろん、パンフレットでは、下村婦人会が「湯楽里」の農産加工体験室を運営し、そこで市房漬の手作り体験ができるなどとは述べていない。しかし、このメディアテキストは、一方で巨費を投入して温泉宿泊観光施設の建設を進める湯前町の観光開発が、同時に他方では、実態からの多少の乖離をも顧みず、これほどまでにして下村婦人会の資源化、資源動員を進めていることを明らかにしているのである。

このように、自治体としての湯前町が、その地域開発政策、とりわけ観光開発政策を展開していく過程で制作したメディアテキストにおいては、きわめて明示的な「地域おこし」、「地域づくり」にかかわるディスクールが編成されている。それによって、「地域おこし」から婦人会活動を距離化するような山北の言明にもかかわらず、下村婦人会は湯前町の「地域おこし」グループとして、湯前町の観光資源へと変態させられようとしているのだ。同様の観光案内を目的としたメディアでも、たとえば熊本圏域向けの地域情報誌の別冊として1997年8月に発行された観光ガイドブック『ぐるりん人吉・球磨』（旬ウルトラハウス発行）では、たしかに湯前町の観光スポットとして下村婦人会市房漬加工部を紹介してはいるものの、婦人会を「地域おこし」グループとするディスクールは、そのテキストにおいてはまったく編成されていない。むしろ、製品の特性を、『湯前町町勢要覧』などでは紹介されない、「防腐剤や着色剤を一切使用していない」ことに求め、その点でこの観光ガイド

ブックのテキストは、『暮らしの手帖』の延長上で構成されているとも考えられる。

そもそも、最近の地域政策のなかでしばしば現れる「地域おこし」のディスクールの意味は、いちじるしく曖昧、かつ多義的であるが、それがメディアテキストにおいて編成されると、テキストの意味の多層性とも相俟って、その曖昧性、多義性は倍加するといってもよい。しかし、この「地域おこし」のディスクールの曖昧性、多義性こそが、下村婦人会のような活動の歴史性や、そのもつさまざまな意味を、活動の当事者の経験の歴史性、あるいは意図や意識とはまったく無関係に、開発政策の正統性や、政策推進のための、いわば文化的資源としての動員を可能にするのである。聞き取り⁷に応じて山北の語った、こうした「地域おこし」のディスクールをとまなう地域開発の在り方についての談話を紹介しておこう。

ここ3、4年ですよ、千葉の幕張メッセなんか行くときに、町が少しいくらか出してくれて。それまでは、全部自分達でばっかりですから。だから行政のお世話にはなっていない。行政がどこかに連れて行くって行って、連れて行ってくれたことないの。農協ももちろん。だけど、村おこしとかだったら、皆、行政とか農協さんやらが一生懸命でしょ。……(中略)……(婦人会の活動は)もう、細く長く。でも、これも前のあれがあるからですよ。今始まって、こんなの作ってたんじゃ、とてもじゃないです。誰も来やしません。昔のあれがあるから、1.5次産業のルーツとかなんとかね。いろんなところでおだてられて。

4. 「地域おこし」のディスクールの多義的膨張

現代社会のさまざまなメディアによって、さまざまな地域社会における、地域住民のさまざまな活動が取り上げられるとき、メディアのもたらす記号が織り成すテキストが成立し、そうしたメディアテキストでは地域住民の活動をめぐる多層的な意味が可能になる。また、メディアテキストにたいする

オーディエンスの「読み」——実際には言語テキストを読んだり、聴いたり、映像テキストを見たりといった行為——を通じて、地域住民の活動をめぐり、より多層的な意味も可能になる。さらに、メディアテキストにおいて編成されるディスクールが、そうした多層的な意味から、地域住民の活動をめぐり「物語」を構成したり、同様にオーディエンスの「読み」におけるディスクールから、新たな「物語」が構成されたりもする。あるいは、メディアテキストが相互に関連しながらディスクールを再編成したり、オーディエンスの「読み」によって可能となった意味が、別のテキストにたいする「読み」のディスクールとなったり、世論のような社会的ディスクールもまた、テキストにおいて再編成されたり、「読み」のディスクールにもなりうるのである。

こう考えると、下村婦人会のように50年にわたる活動の歴史を通じてメディアによって何度も紹介されると、その活動をめぐって、メディアテキストにおいて可能となる意味も、「読み」によって可能となる意味も、きわめて多層的なものとなる。メディアテキストにおいて編成されるディスクールも、オーディエンスの「読み」のディスクールも多様になり、そこから構成される下村婦人会の「物語」もまた多様なものとなり、活動の歴史の長さゆえに、メディアテキストに関与しうる社会的ディスクールも多様になる。したがって、下村婦人会の展開してきた地域活動のもつ意味とは、たんにその歴史の長さからだけではなく、その活動をめぐりメディアテキストが織り成されてきたことによっても、きわめて多様なものになっているといえるのである。下村婦人会の場合のように、現代のメディア環境において現れる、こうした地域活動の意味の多様性をもって、現代の地域文化の特性とみなすこともできるかもしれない。

しかし同時に、近年では、さまざまな地域社会における、「地域おこし」や「地域づくり」という言葉を用いた、さまざまな地域開発政策、地域振興政策、あるいは地域の活性化へ向けての施策もまた、さまざまなメディアによって、数多く取り上げられている。そして、この言葉をめぐっても、さまざまなディスクールが、さまざまなメディアテキストにおいて編成されているのである。

すでに述べたように、メディアテキストに現れるこの「地域おこし」や「地域づくり」といった言葉も、それをめぐってメディアテキストにおいて編成されるディスコースも、その意味は曖昧で、多義的であるが、当の地域政策としての「地域おこし」、「地域づくり」も、実際の展開はきわめて多義的である。どのような施策を講じても、そこでどのような地域住民の活動が展開されても「地域おこし」、「地域づくり」とよべるほどで、その点をもって徳野貞雄は、これは、「精緻化された理論の下に行なわれている地域政策ではない」（徳野〔1997：10〕）と指摘する。ただ、それらに共通する特徴は、政策と地域住民の活動の内容の総合性と経済性が目立つこと、地域住民の活動の自主性が建前として重視され、それにたいする自治体行政からの支援や事業化が進められていること、そして、理論的支柱や方法論的枠組が確立されているわけではなく、いくつかの自治体における独自の政策や活動の成功例に注目して、その手法を「活性化事業」として取り込んでいることである〔10-11〕。つまり、多くの場合、「従来の国からの補助事業としてのハード事業だけではなく、地域住民が自ら考案した様々のソフト事業を組み合わせ、地域活性化している各地の先進地の地域事例を発掘したり、その手法を学び、行政政策に取り込もうとしている」（傍点・引用者、〔11〕）のである。

いずれにしても、その総合性に注目し、それを自治体が支援し、場合によっては事業化していくというかたちで、地域住民の活動の地域開発政策への収容が進められ、地域住民の活動が何らかのかたちで、地域開発のための資源として動員されるのが、この「地域おこし」政策にはほかならない。「地域おこし」政策の総合性という点では、地域住民によって運営される地域のイベントなども収容されることになるが、その場合にあっては、イベントをめぐるさまざまな意味が資源化され、文化的資源として動員されるのである。具体的には、文化施設や、湯前町のような「体験型」、「交流型」の宿泊観光施設の建設といった、「箱もの」と揶揄されるハード事業が推進される場合に、地域住民の手によるイベントなどの文化的活動が、そうした「箱もの」に名実ともに収容されることによって、地域住民の活動が、建設事業としての政策

を正統化する文化的資源として動員されることになる。また、「地域おこし」政策における経済性という点では、たとえば、「特産品」の製造、販売による売り上げなどのかたちで、一定の経済的効果をとともなう地域住民の活動が収容されるような場合にあっては、「ボランティア」とよばれる実質的なノン・ペイド・ワークが、地域開発のための資源として動員されることにもなる。

地域住民の活動の収容、資源化、資源動員は、「地域おこし」という政策それ自体の特徴であると同時に、「地域おこし」という言葉をめぐるディスカールの特徴でもある。つまり、このような特徴と性格をもった地域政策が、「地域おこし」という言葉で総称されることによって、政策としても、言葉としても、曖昧、かつ多義的な「地域おこし」のディスカールが編成され、それこそが地域住民の活動を「地域おこし」の活動として意味付け、活動のもつ意味や、その成果の意味を資源化し、動員していくことを可能にする戦略的ディスカールとなるのだ。とりわけ、こうした戦略的ディスカールとしての「地域おこし」のディスカールが、メディアテキストにおいて編成される時、もともとメディアテキストが可能にしていた多層の意味も、「読み」による多様な意味も、さまざまな「物語」も収容され、このディスカールは、より一層、曖昧で多義的になる。

かつての「リゾート開発」のような政策も、大石裕によれば、「曖昧かつ多義的なリゾートという言葉を紹介することにより、それとは本来対立し、相容れないはずの脱物質主義的価値の実現を標榜することが可能となった」(大石〔1998：232〕)のである。まったく同様に、メディアテキストにおける「地域おこし」のディスカールが、多義的な膨張を遂げていくことで、「地域おこし」という言葉を介した地域開発政策もまた、従来の自治体や国の無策に抗して、地域住民の創意と工夫によって展開された活動や、あるいは建設事業を中心にした開発とは相容れないはずの文化的活動の意味までも、資源として動員するようになる。

下村婦人会の場合でいえば、国の農政の無策から生じた地域経済の困難を、地元の農産品の加工と製品の販売によって乗り越えるという、一定の経済効

果をもたらず手法が、意味的に膨張した戦略的ディスクールによって、「地域おこし」活動として意味付けられ、新たに観光開発のための資源として動員されようとしているのである。この手法も、当初は「奉仕」というノン・ペイド・ワークによって、軌道に乗ってからも、「わずかな日当」の低賃金労働によって支えられてきたことを想起するなら、地域住民のこの種の労働が、「地域おこし」活動として意味付けられ、資源動員されようとしていると見ることもできよう。その過程では、多義的な開発政策の戦略的ディスクールが、「奉仕」活動に、現代的に言い換えるなら「ボランティア」活動に、「地域おこし」活動という意味を与え、そうした活動の政策的な資源動員をイデオロギー的に粉飾するのである。

財政的困難や地域住民とのコンフリクトなどから行き詰まった、従来の地域開発政策を打開しようとする新手の開発政策として、現代日本のいたるところで、この「地域おこし」の政策は展開されている。そこでは、現代の地域開発政策と、それをめぐるメディアテキストとの双方で、相互的に編成される「地域おこし」のディスクールが多義的な膨張を遂げながら、地域住民の生活や活動のさまざまな意味を政策に収容し、それらを「地域おこし」へと収斂させたり、再構成することによって、資源化と資源動員を図るという文化的権力作用を形成してるのだ。それゆえに、現代の地域開発政策の実態といえば、全国いたるところで、公営の多目的ホールや観光宿泊施設などの建設事業や、程度の差こそあれ、制作に広告代理店が関与して企業協賛をとりつけたような公営イベントなどが展開され、いずれにも地域住民の「地域おこし」グループが何らかのかたちで動員されているといった状態である。湯前町役場企画振興課が認めるように、湯前町の周辺を見ても、相楽村に、その名も「ふれあいりフレ茶湯里」という、「湯楽里」と類似の都市と農村との交流をめざした温泉宿泊施設が、1997年9月にオープンしている。

自治体が、行政圏域としての「地域」のなかに、施設やイベントを「おこし」て人びとを動員しても、人びとが、そこに生きる固有の意味が成立する場としての地域はおこされてはいない。地域開発にかぎらず、現代の「開発」

についてG. エステバは次のように述べている。

現実に現代人の前にさしだされたのは、各地に生きる具体的な人びとが固有の文化をはぐくみながら紡ぎだしたイメージでもなければ、その地に根ざした具体的な神話でもなかった。現代人に与えられたのは、「開発」という比喩と、成長、発展、成熟、近代化といったその意味論の網のなかに暗黙にうちにこめられた幻想だったのである (Esteva [1992=1996 : 40])。

この見解に倣うなら、現代日本の地域開発によって与えられたのは、膨張し、瀰漫する「地域おこし」というディスクールと、それが編成されるメディアテキストの多層的意味の網のなかにこめられた幻想なのである。

註

- 1 この聞き取り調査は、1997年9月23日に、山北幸と下村婦人会のメンバーを対象として、湯前町下村公民館において実施した。
- 2 同上。
- 3 テキストにたいする読者の「読み」における、社会的ディスクールとしての世論については、Barthes [1970=1973 : 173-174, 178-179] を参照。
- 4 註1に同じ。
- 5 この聞き取りは、1997年9月9日に、岸本晃を対象として、熊本学園大学において実施した。
- 6 この聞き取りは、1997年9月22日に、湯前町役場企画振興課を対象として、湯前町役場において実施した。
- 7 註1に同じ。

参考文献

- 天野正子 (1996) 『「生活者」とはだれか』 中央公論社
- Barthes, R. (1970) *S/Z, Édition du Seuil*. =1973 沢崎浩平訳『S/Z』 みすず書房
- (1982) *L'obvie et l'obtus: Essais critiques III*, Édition du Seuil. = 1984 沢崎浩平訳『第三の意味』 みすず書房
- Esteva, G. (1992) “Development” in Sachs, W. eds, *The Development Dictionary*, Zed Books. =1996 三浦清隆他訳『脱「開発」の時代』 晶文社
- NHK放送世論調査所編 (1983) 『図説・戦後世論史 (第二版)』 日本放送出版協会
- 大石裕 (1998) 『政治コミュニケーション』 勁草書房
- 徳野貞雄 (1997) 『「村おこし」の原型から学ぶ』 鈴木廣、木下謙治、三浦典子、豊田謙二編『まちを設計する』 九州大学出版会

『暮らしの手帖』 (1971年2月)

『1996 湯前町町勢要覧』

* 本論文は、1997年度熊本学園大学学内科学研究費の助成による研究成果である。